

介護初期の家族介護者に対する認知症カフェ参加促進に向けた支援の在り方 —酒田市における認知症カフェの実態調査を通して—

土門 美結

日本では高齢化の進行に伴い、認知症高齢者の数が増加しており、それを支える家族介護者の負担が大きな社会課題となっている。特に介護初期の家族介護者は、知識や経験が乏しい中で突然介護に直面し、不安や孤立感を抱えやすい時期にある。一方、認知症カフェは、地域の中で交流や支援につながる場として全国で広がっているが、介護初期の家族介護者の参加は十分とはいえない現状がある。

そこで本論文では、介護初期の家族介護者に対する認知症カフェ参加促進に向けた支援の在り方を明らかにすることを目的とし、酒田市で開催されている「もしえのん・あののんカフェ」を対象に調査を行った。

第1章では、認知症カフェの役割や効果、家族介護者が抱える負担、介護初期における心理的特徴について先行研究をもとに整理した。

第2章では、家族介護者が直面する精神的・身体的負担や介護初期における心理的变化を整理し、介護初期支援の重要性を明らかにした。

第3章では、酒田市の高齢化の現状と認知症カフェの実態を踏まえ、「もしえのん・あののんカフェ」を調査対象として調査方法を示した。

第4章では、調査結果をもとに、認知症カフェの運営体制や参加者の実態、参加促進に向けた工夫、役割と課題について整理した。

第5章では、調査結果を踏まえ、介護初期の家族介護者が認知症カフェに参加しやすくなるために必要な支援の視点や工夫について整理し、今後の認知症カフェの在り方について考察した。